平成24年度　運営諮問会議開催要項

１．日　時　平成２５年３月１４日（木）１４時００分～１６時３０分

２．会　場　宇部工業高等専門学校　大会議室（管理棟３階）

３．出席者

○運営諮問会議委員（五十音順）

岩尾克巳　委員	金重和義　委員
久保田隆昌　委員	品川　博　委員
竹本芳朗　委員	千葉泰久　委員
津田賛平　委員	野村和芳　委員
堀　憲次　委員	向井隆男　委員
山田隆裕　委員	

○宇部工業高等専門学校教職員

福政　修　校長	杉本信行　副校長
小倉　薫　校長補佐（教務主事）	山下祐志　校長補佐（学生主事）
武藤義彦　校長補佐（寮務主事）	藤田活秀　専攻科長
髙橋正和　図書館長	藤田和孝　地域共同テクノセンター長
岡村好庸　情報処理センター長	橋本　基　技術室長
吉田政司　機械工学科長	三宅常時　制御情報工学科長
山﨑博人　物質工学科長	内田保雄　経営情報学科長
岩元修一　一般科（文系）科長	中村貢治　一般科（理系）科長
内堀晃彦　キャリア支援室長	
村田正一　校長補佐（事務部長）	黒田伊久男　総務課長
廣兼　敦　学生課長	

（陪席）　総務課副課長、学生課副課長、企画連携事務室副室長

４．日　程

14時00分　開　会

校長挨拶

運営諮問会議委員及び宇部高専出席者の紹介

資料の確認

日程説明

14時20分　議　　事

一、議長選出

二、議長挨拶

三、議題

(1) 平成25年度入学者選抜試験の実施状況について

(2) 平成24年度計画の取組状況について

(3) 宇部高専の教育改革・高度化について

(4) その他

16時20分　議長挨拶

校長挨拶

16時30分　閉　　会

5．配付資料

○運営諮問会議　席次表

○運営諮問会議委員名簿(出席者)

○運営諮問会議規則

○議事資料

議題１：資料１　平成25年度入学者選抜試験の実施状況について

議題２：資料２　平成24年度計画の取り組み状況（抜粋）

議題３：資料３　宇部高専の高度化・個性化に向けて

○参考資料

・平成24年度宇部工業高等専門学校の動き

・宇部工業高等専門学校　中期目標

・宇部工業高等専門学校　中期計画

・宇部工業高等専門学校　平成24年度(2012)要覧

・宇部工業高等専門学校　学校案内2013

議　　事

（1）開会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

（2）校長挨拶

宇部高専の福政でございます。本日はお忙しいところ私ども宇部高専の運営諮問会議に御出席いただきましてありがとうございます。

宇部高専は、高専制度がスタートした年に開設されまして、昭和37年でございますが、昨年50周年を迎えました。昨年10月10日には学校としての記念式典、記念講演会を実施させて頂きましたけども、委員の皆様方にも大変お世話になっております。どうもありがとうございました。

節目の年を迎えた訳ですけども、これからの高専について、今回は御意見を伺いたいと言うことで、まず、今年度を含め入試状況、5年の中期計画と言うことで運営されているのですけども、今年度の取り組み、どういう項目でどういうことをやっていたかということをお話しさせて頂いて、最後に、これからの宇部高専ということにつきまして資料を提供させて頂いて委員の皆様方からの宇部高専に対する御意見を伺って、次の平成26年からの第3期目の中期計画がスタートしますけれど、25年度には3期目に向けての計画だとか、2期目の最後を迎えると言うことでいろいろ取り組みたいと思っていますので、御意見を参考にさせて頂きたいと思っております。

本日は、時間が限られておりますけれども、どうか忌憚のない御意見をいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

（3）委員・出席者紹介、資料確認、日程説明

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、総務課長から、配付資料の確認が行われ、運営諮問会議開催要項を基に日程の説明があった。

（4）委員長選出

総務課長の進行により、運営諮問会議規則の規定に基づき議長に堀委員（山口大学工学部長）が選出された。

（５）議長挨拶

それでは、お手元の運営諮問会議開催事項に基づきまして、議事を進めさせていただきます。

この会議の職務は、運営諮問会議規則によりますと、宇部高専の教育研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長に対して助言を行うということになっております。各委員におかれましては宇部高専に対しての御助言、御意見等を自由にお聞かせ願えればと思っております。

本会議の進行の形式としましては、初めに宇部高専側から議題に対して説明をしていただきまして、その後、意見交換をお願いしたいというふうに考えております。

それでは、早速議事に入りたいと思います。

（６）議事

（議長）

まず、議題１、「平成２５年度入学者選抜試験の実施状況」について、小倉教務主事から説明をお願いします。

（教務主事）

お手元の資料１にパワーポイントのスライドが出ております。平成２５年度の入学者選抜試験実施状況についてですけれども、本校は機械、電気、制御情報、物質、経営情報の５学科ございます。各学科が募集人員４０名で計２００名の定員で毎年入学試験を行っております。それで、４０名のうち、各学科とも募集人員１６名程度に関しては推薦で選抜することにしております。

選抜方法ですけれども、推薦選抜と学力選抜と。選抜の日程ですけれども、２５年の１月７日から１月１０日までが推薦の出願期間、試験日が１月２２日火曜日でした。合格発表を１月２９日火曜日に行いました。

学力選抜の方は、１月２４日から２月１日まで出願を受け付けまして、２月２４日日曜日に学力試験を行いました。先週の月曜日に合格発表を行っております。
推薦選抜と学力選抜の試験会場ですけれども、推薦選抜は面接を実施するという関係で、本校のみの１会場で推薦選抜の試験を行っております。

学力選抜に関しては、県内できるだけ広く受験する機会を設けようということで、本校と学外会場として下関、長門、山口、岩国、学外会場４会場でも学力選抜を実施しております。

この４会場に関しては、徳山高専と相乗りという形で試験会場を運営しております。下関と長門に関しては、宇部高専が主管校として主として会場設営とかそういう面倒を見ると。山口と岩国に関しては徳山高専のほうが会場設営等面倒を見るといったような形で相乗りをしております。

試験を行った結果として、募集人員に対して各学科、推薦、学力に対してどの程度の志願者があったかを示している表でございます。

推薦選抜は１６名程度を選抜したいという募集人員に対して、機械工学科２５名、電気工学科２１名、制御情報が２８、物質が４０、経営情報が２５、合計１３９名が応募してまいりました。

その志願者数の括弧内の数字というのは、女子中学生の志願者数で内数となっております。ですから、１３９名推薦で応募してきたうち５５名が女子中学生であったということでございます。

推薦選抜に関しては、機械から順に１８名、１８名、１７名、１７名、１７名、合計８７名の合格を発表しております。１６名程度を推薦でとるということをうたっておりますので、学力ではおよそ２４名ということになりますけれども、その２４名程度の募集に対して学力選抜、機械が５７、電気が３１名、制御情報が６１名、物質が３２名、経営情報が４１名、合計２２２名が学力選抜のほうに応募してまいりました。

推薦は先ほど申し上げましたように、８７名の合格を出しております。不合格となった５０名強ですけれども、そのほとんどが学力試験のほうにも回りまして、学力選抜とも受けております。

それで、機械から順に推薦と学力に出願してきた出願者の合計数が８２名、５２名、８９名、７２名、６６名、合計３６１名ということになっておりまして、３６１名といいますと、２００名の募集に対して３６１ということで、志願倍率が１．８倍というふうになっております。

各学科、志願倍率には差がありますが、これは年度によって高かったり、低かったり、ある学科が高かったり、ある学科が低かったりといったようなことを繰り返しております。

志願倍率１．８倍という倍率は、最近で言いますと、ここ１０年間、昨年が１．９倍でございます。それに次いで高い倍率ではございます。ただ、我々目標としては２倍というのを一つの目安として掲げておりますので、なかなか目標である２倍には到達しないという状況でもございます。以上が、志願者数と志願倍率のおよその結果でございます。

私は教務として、この志願倍率をできるだけ高くすることを心がけて中学校のほうへのＰＲ活動などを行っておるんですけれども、中学校の人口というものが減少していっております。この図というのは、県内の中卒者人口と本校の志願倍率の推移を示したものでございます。

今後の志願倍率に関しては、平成１５年以降の値が手元にありましたので赤いマークで示しておりますけれども、黒で示しました県内の中卒者人口が平成４年以降のデータですけれども、急速に減少していっております。平成２０年頃から少しその減

少の度合いが緩やかになりまして、でもゆっくりと減少は続いていると。

それに対して本校の志願倍率は、平成１５年以降、平成２０年まで、およそ県内の中卒者人口の減と同じような減り方をしているようにも見えます。それから、平成２１年以降少し盛り返したということで、今年、志願倍率１．８倍となっているというのが現状でございます。

このまま県内の中卒者人口が減り続けていくと、当然１．８倍という倍率をキープすると、あるいは目標である２倍を達成するということに対して少し困難さが増していくといったことが言えるかと思います。

あともう少し細かくデータを見るために、エリアごとの中卒者人口と本校志願者数などを比べてみました。宇部市は推薦が６３名の応募がありました。学力に１３６名ありまして、合計１９９名で、２番目に多かった市町村が山口市で合計４９名ございました。下関が４７名、山陽小野田が３９名と続いております。これに対して、その市町村の中卒者人口、宇部が今年、１，５９９名に対して１９９名、全体で３６１名でしたから、５５％が宇部市からの志願者です。宇部市１，５９９名に対して１９９名ですから、１，５９９名のうち１２．４％の中学生が本校を志願したと見ることができます。

山口市は宇部市に次いで本校志願者が多かったのですけれども、１，９４３名に対して４９名ということで、志願率にすると宇部からの志願率の約５分の１程度、２．５％ということでございます。下関市になると、２，４１６名に対して４７名ということで１．９％。山陽小野田市は３９名だったんですけども、５７２名に対して３９名ということで、志願率にすると６．８％となります。

この志願率と中卒者人口というものを見比べたときに、本校として、中学校さんへのＰＲ活動、今後どこに重点を置いていくのか、いくべきなのかといったようなことを少し考えると、宇部の１２．４％というのは、これを１５％に高めたり、２０％に高めたりというのは、これはかなり困難なことだと思いますので、山口市の２．５％あるいは下関の１．９％、このあたりをもう少し高めたいと思っております。このあたりを５％程度まで持っていくことができると、結構志願者を稼ぐことができるのではないかと思っております。

ここでもう少し、また別のデータがございまして、宇部市は１９９名の志願者がございました。全体の３６１名のうちの５５％に相当するんですけども、宇部のこの中卒者人口というものに基づいて今後の志願倍率を想定したのがこの図でございます。

宇部の中卒者人口の推定値に関しては、平成２４年以降のデータがございました。それと、本校の志願倍率の関係を示したのがこの図でございますけれども、今後、宇部の中卒者人口は、先ほどの県内の人口の減よりも少し角度が強いというか、減り方が少し多目に減っていくというような傾向が見てとれます。つまり、ほぼ５５％が宇

部市内からの受験者だったんですけれども、その宇部市内の中卒者人口は今後こういう形で減っていくということが予想されます。

ということもあわせて我々中学校サイドへのＰＲ活動を行っていかなければならないというふうに考えております。それを踏まえつつ、山口、下関あるいは防府エリアへのＰＲをどんどん展開していく必要があろうというふうに考えております。

以上です。

（議長）

どうもありがとうございました。

それでは、ただいま御説明がありましたことにつきまして御質問、御意見等がございましたら、よろしくお願いいたします。

（千葉委員）

５ページのところの志願数ですね、宇部市はこういうふうなことなんですけども、山口市と防府市あたりが徳山高専に対して徳山市内とその周辺、どれぐらい来てるか。要は宇部高専の魅力と徳山高専の魅力とか、そういった何か比較したものが。

（教務主事）

こういうデータがございます。山口会場、学力試験の会場ですね、山口会場のほうは徳山高専が担当したんですけれども、今回宇部高専と徳山高専を受験した人数でいうと、宇部高専を受験した人数のほうが少し多ございました。

（千葉委員）

ということは、この分は全体が高い、宇部市が高いのは、宇部市が高専に対する認知度が高いということですか。徳山との比較とかそういったことではなくて、山口なら山口がこの周辺が低い、地域的なそれは教育的な問題あるかもわかりませんけども、認知されてる形として宇部では高い。徳山は徳山の中で高い。

（教務主事）

徳山のデータはちょっと詳しくは承知しておりませんので。

（千葉委員）

そういったのを調べて、徳山でやっぱり地域の中でその全体に対する割合が高いんであれば、やっぱり地域がやっぱりそうなのかな。それから今度はもう少し、そこが中が見えないとか、周辺の少し来やすいところにＰＲ活動して認知度を高めるような、上げることはできるのかなと。山口市の例ではどうも徳山高専よりはこちらの方がちょっと優勢ということはある。

社会の流れとして徳山市内で徳山高専の割合をちょっと調べてみるとか、何か位置づけという、高専に対する市民感情というか、一般的なそういったものが少し見えてくるかもわかりません。

もう一つは、瀬戸内海工業地帯に位置してる徳山地区と宇部地区、それに対してこ

れはやっているがこれはやっぱり足らないよというような、何かそこあたりを調べて何か。要はこの志願者を増やすとしたら、この位置づけをしてやったらいかがですかね。

（校長）

そのとおりだと思ってまして、私も２年前から中学校を回って、校長さんといろいろ話をしたりしてるんですけど、今の志願者のことでいうと例えば下関ですね。これは２年前から北九州高専と合同で説明会というか、これは学生集めてではなくて、中学校の先生方に呼びかけてやってるんですけど、何で北九州高専かというと、私もこの志願者の数を見たときに、宇部高専、大体この４０から５０ぐらいな辺で推移してるので、北九州高専へ行ってるのかと先方の校長に聞いたら、下関からは数名なんですね、志願者が。だから、下関地区がそんなに北九州高専を受けてるわけじゃない。かといって宇部高専そんなに大量ではない。一方で下関のほうは工業高校が２つが合併になったりという予定がされて、中学生から見たときに、工業とかものづくりとか、そういうものに対する理解度というか、そういうものが学校の中でなかなか少なくなってるというようなことは言われたんですけども。だから下関地区に対しては工業高専というのがどういうものかっていうようなことを言っていかないといけない。

それから、山口でも下関でも、この辺であると自宅通学ができるところとできないところで。できないとなると寮だとか、そんなことを考えたりということになりますので、宇部高専のそういう学生をどうケアしていくかという施設との対応もあります。

防府だとかあのあたりの中学校を回ったときに、行きたいのはいるんだけども、山陽線で新山口行って、それからまた宇部線でとなると、というようなことを言われるところがいろいろありましたから。寮に入ってでもやるのかっていうふうになると、そこまで踏ん切りがつかないというところもあるのかなとか、いろんな面があるんですけども、そういう近隣の数の多い都市部での浸透と、それはちょっといろんな面があって。そうは言っても宇部高専で教育受ければ出口はこういうふうになってるっていうふうなことをちゃんとＰＲしていくという、これは必要だと思ってやってます。

それからもう一つ、宇部のあたりは本当にもう認知されてるんで、この比率を上げるというのはなかなか大変かもしれないんですけど、特に男子、女子が半々にいるとすれば、機械、電気、制御のあたりに女子学生の志願者が少ないので、こういう工学系の分野でも女子学生も幾らでも出口はあるんだという、そういうＰＲの仕方、それと高専としてのＰＲ、それからそういう女子学生へのＰＲの仕方、そういう両面でいろいろ考えないといけないなと思ってます。

（千葉委員）

山口宇部空港、私たちは非常に便利だと思いますね。ところが、よその方、徳山とかあのあたりにいらっしゃる方とかから言わせると、何か非常に遠いと言うんです。

なぜか。新山口へ降りたはいいが、バスがなかなかいいのがないんです。これは宇部市の議長と話をせにゃいかん問題かもわかりませんが、新山口で新幹線降りて、飛行機に間に合うバスをうまく乗らないと、便利なようで、宇部にいる人間は便利なようなけども、非常に遠い空港やと、外部から見たらですね。そういったことになると、こういった例えば山口なんかで道路いいのができたんですね。そうするとバスの便とか何とかそういう通勤バスとかそんなことは何か頼んだらできないもんなんですかね。幼稚園なんかやっとるでしょ。

(校長)

それもゼロじゃなくて、何かそういうことも。だから寮に入ってまでというと、時間決めて新山口まで来てもらえれば、ちゃんと朝何便とかやりますよというようなことを考えるとか、そういうことまで通学についての考え方を広げていかないと、なかなかＰＲが片手落ちになるかなと思って危惧している。

特に寮の改修がなかなか進まないと、そういうところには入りたくないとか、そういうのが解決するまではそういう議論も考えないといけないんではないかと思ったりもします。

(津田委員)

寮定員というのは、だいたい何人ぐらい。

(校長)

大体入ってるのは３００人。寮への入寮希望者はほぼ全員入れる状態なので、寮が満杯になってて入れないということは今のところはないです。

(品川委員)

同窓会のほうでもいろいろ親御さんへの働きかけなんか相談を受けてるんですが、宇部市内はともかく、下関なんかで中学校の先生方等に働きかけておられると思うんですが、やっぱ親に高専のよさを知ってもらう方法を何か直接伝えられるような機会をつくるといいんじゃないかと思うんですが。市内でも宇部高専のことはよく知っておられるようで、名前はわかってるんだけど、実情は例えばいろんな選択肢があるだろうと思うんですね、そういうところを知ってる方は意外と少ないんですね。これから見ると、下関を重点的に何か働きかける。そのための何か直接働きかけられるようなアイデアがあるといいと思うんですけどね。

(教務主事)

中学校のほうで主催される進学説明会に行きますと、中学生３年生と保護者の方とおられます。そこで、時間は短いですけども、１０分か１５分ぐらいで、宇部高専の良さ、就職率がいいとか、あるいは進学に関することだとか、あと勉強だけでなく、クラブ活動なんかもクラブがものすごく多いとか、課外活動なんかもＰＲさせてもらってるんです。ただ、それはそこの中学校の方だけですから、例えば会場を借りて保

護者向けのＰＲイベントのようなものを企画したり、今後努力していきたいとは思います。

（品川委員）

特に、奨学金なんかの制度は充実してるんじゃないかと思うんですよ。その辺も含めてＰＲされたらいいんじゃないかなという気はするんですけど。

（校長）

保護者説明会というのを、これまで一括してやってたのを、１日ではあるんですけど、午前午後に分けて宇部市内と宇部以外というような形で募るようになって、そういうところの出席者というのはやはり増えてくる傾向があるので、そういうようなものをここでやるというのは学校を見てもらうということもあって非常に利点なんですけど、そういう学生と保護者同席の形になりますから、そういうのを場所、学校を見てもらうというようなことはできないかもしれないんだけど、そういうのを保護者説明会というようなものを出向いて行ってやるとか、そういう形もいろいろあろうかと思うんですけども。オープンキャンパス以外にそういう保護者説明会というようなものをやったりとか、それでどれぐらいＰＲ効果があったのかという、そういう結果を見つつというところまではまだ詰めてなくて、そういうことをいろんな形で宇部高専の説明をという状況で今動いているとこですね。

（議長）

そのほか、何か。

（岩尾委員）

よろしいですか。３６０人ぐらいが応募して２００人ぐらいが合格されてるというところで、量的にはやっぱりどうですか、２００人を大体できますから、最近ちょっと私どもも直面してるのが、「ゆとり世代」が入ってきて、やっぱりちょっと低下ぎみかなって、企業のほうでも感じてます。２００名の合格ラインっていうのは、毎年問題が違うでしょうから一律に評価できないんですけど、データ傾向なのか、維持しているのか、ちょっとそのあたり、何か情報がありましたら。

（教務主事）

言われたように、問題も違いますので一概には判断できないところはございます。ただ、独断で答えさせていただくと、多少そういう「ゆとり世代」というんでしょうね、そういう傾向、入ってからの学生の勉強の仕方とかというのを見ても、ゆとりの影響なのかなと思わせるようなところもございますので、ゆとり教育の影響はまだあるというふうに感じております。

（岩尾委員）

２００に拘らずに切る、そういうことではできないんですね。

（校長）

高専機構は今年度は定員減とかそういうことはしないということで、それで３期目がどういうふうになるのか、そういう定員減みたいなことは言ってはいません。ただ、今言われたような高度化というか、入ってからの学生の指導とか、そういうことについてはやっぱり何か考えなきゃいけない。

それと、これまでこれはちょっと３番目の問題になっちゃってるんですけど、これまではよくやってるが、しかしこれからということで質保証というふうなことで、各高専でまちまちのような印象を与えるのもいけないというので、それで各専門分野にわたってこの分野であればミニマムスタンダードでこういうものを教えるんだというような、コアカリキュラムという考え方をやったり、それから、エンジニアリングというのはいろんな要素が絡んでくるから、それを体験させるようなエンジニアリング・デザイン教育をやっていくんだというようなことを言ってて、各高専そういうことをいろいろ独自で考えなさいと。だから、学科を大ぐくり化してとか、あるいはフレキシビリティを持たせるように学科を少し大括りっていう言い方じゃないんですけど、一括募集して、それでコース制にだとかですね。時代に合ったようなコースを取り入れてというようなことだとか、今までのままではいけない、そういう意識を持って、各高専取り組めということになってますね。

（議長）

その他ございますでしょうか。

（議長）

先ほどの寮の件なんですけど、大学と高専で全然違うと思うんですけども、うちの大学でやっぱり寮を２部屋を１部屋にするとかですね、新しい寮ができると、そこには全員埋まるんですよ。恐らく中学生、高校生が寮を見て、これなら行ってみようというふうに思うのかなという気がないでもないんですけど、そういうとき、我々は結果的にＰＦＩで最終的には寮のお金が入るからということでＰＦＩできれいにしたという例もあるんですよね。

先ほど、高専は、なかなか寮の改修ができないというお話だったんですけど、そういうふうなことはお考えにはならないですかね。

（校長）

我々一番重要なところだというんで、今概算要求ではそれを１位に出してるんですけども、やはりただ古くなったからとか、あるいは耐震補強で改修あるから、それに本格的な改修を重ねてとかというふうになると、コンセプトがいろいろ要ることになるし、それで今宇部高専ではそういう改修というので一番おくれてる部分が寮の部分になってて、女子寮は昨年改修できて、今度は留学生とかそのあたりを主に入れてる部分に営繕費がつくことになりましたので、徐々に変わっていくと思うんですけども。男子寮の部分も今いろいろ機構と交渉してるとこなんですけど。

（議長）

なかなか民間からのお金って難しいわけですね、高専の場合には。

（校長）

多分、大学は一つ一つが独立法人だからできるのでしょうけど、高専でそれはちょっとなじまないんじゃないかと思いますけどね。

（議長）

そのほか何かございませんでしょうか。

（金重委員）

山口県内というか、ほかの県なんかに比べて、町が分散してるというか、例えば普通の県だと県庁所在地に一番多くてそこに高専があったり、大学があったりするんで、そこに集まる。そういう町になっていく県が多いんですけど、山口県の場合は人口１０万人以上は、結構ある。例えば周南、先ほどもちょっと話がありましたけど、周南から受けて、すごい遠い感じがするし、宇部から周南に行ったら遠い感じがする。そうするとそういうこと考えると、例えば宇部高専、名前が宇部だからそうなんかもしれませんけど、宇部高専ってあれ宇部じゃないのと。そういう感じが非常に強いというか、そうするとどうしても宇部高専の活動というか、知名度上げるためには、やはりその県の県庁所在地に集まって来いやじゃなくて、そちらに行かないとどうもＰＲが進まないというか。例えば、さっき下関の受験生となれば、下関の中学校に高専のＰＲというんじゃなくて、高専が日ごろ、宇部市内でいろんな中学生だとか小学生にいろんなものを教えたり、体験学習みないなものをやって、そういうのを出向いて行かないとですね。

僕、気になるのは、さっき防府の場合は、防府でこんなに不便なのによく来てるなと、数来てるなと感じたんですけど。ただ、萩の人なんかというのは瀬戸内に出たいと思うんだけども、やっぱ交通が不便だということがあるかもしれませんけど、萩に例えば出向いてそういういろんな教室を開くとか、美祢とか長門とか、そういうことはやっておられるんですか。

（副校長）

地域は別にいたしまして、本校の広報活動の一端として、現在下関に出向きまして、本校のＰＲ活動をしております。

それから、以前は防府も行ってスーパーなんかのエリアを借りてやってたんですけれど、ちょっと日程調整がつかなくて、今下関だけになりました。

それとあと、もちろん宇部市内でのイベントもやっております。ただ、御指摘のように、もう少し北浦といいますか、山陰地区を重点的との考えもあるやもしれません。以前は長門でもやってたこともございましたけど、今ちょっと手が回ってない状況です。

（議長）

そのほか。どうぞ。

（野村委員）

中学校のほうで私もこちらの高専の推薦あるいは一般入試、それから公立等もいろいろ事前に１月とか２月に子供たちに面接をしての気づきなんですけれど。今、年々自宅から離れたくないっていう。例えばいろんな高校へ進学っていうことで面接するときに、その高校を卒業してから後はどう考えてますか。早く言えば就職とか進学。そうしたときに何か年々、いわゆる自宅から通学、あるいは通勤できるっていう傾向が見えてきてるのかなっていうことを、この三、四年ですが思っております。

それから、以前、私も下関市の響灘側の中学校におりましたけれど、やはり宇部高専の受験というケースがありましたけれど、同じ下関市でも瀬戸内海側の中学校と比べるとどうしても一旦下関の駅まで行ってからっていうことになるんで、通学っていうところが非常にネックになってる。さりとて、寮があるじゃないのっていうふうなことを申したんですけども、いや寮に入ってまではっていう、結局、自宅から離れたくないっていうような意識の子供たちがおって、それが少しずつ増えているかな、傾向としてですね。そういうふうなことを、全部の学校じゃないかもわかりませんけど、いろいろお聞きする範囲の中ではそういう傾向が強まっているというふうに思っております。

（議長）

その他にもあろうかと思いますが、次の議題に移りたいと思います。

「平成２４年度計画の取り組み状況について」ということで、杉本先生よろしくお願いします。

（副校長）

それでは、お手元の資料の２をご覧下さい。座って報告させていただきますことをお許しください。

タイトル、「２４年度の計画の取り組み状況（抜粋）」と書いてございます。実は今年度の計画の取り組み状況を各部署に報告依頼をかけて、明日が締め切りということで、完全にまだ最終総括はしてないんですけれども、昨年の秋、中間報告書をつくりまして、それに基づいて、その中から少し重点的に抜粋させていただきました。これを４ページものにまとめております。

本文はちょっと３０ページ近くございますけど、抜粋させていただきました。表形式でまとめておりますけれども、１ページの一番左側の列、１番、「教育に関する事項」というのがございます。これが計画の大きな柱の一つでございます。２ページ目もずっと「教育に関する事項」が続きまして、３ページ目の下のほうに２番目として「研究に関する事項」、そして４ページ目、最後に３番目、「社会との連携、国際交

流」と、この３つの項目に対してそれぞれの計画が細分化されております。教育、研究、地域連携、この３つの柱についてまず取り組み状況を報告させていただきます。

最初のページに戻りまして、「教育に関する事項」のサブ項目、（１）番に「入学者の確保」というのがございます。先ほど教務主事のほうからも御報告させていただきました本年度の入試状況でございましたけれども、ここでは平成２０年度までに遡った状態での志願者倍率の推移を示しております。実は２０年度、表のａ、各学科あるいは高専全体の志願者倍率１．５倍と、一番のどん底でございました。近年ではですね。それからずっと徐々に立ち直りつつありますけれども、こういう状況で今年度１．８倍に至っております。

ｂのテーブル表、推薦志願者について着目しますと、募集定員は当初、昔は２割程度とかいうような表現をしておりました時代が長かったんですけれども、それがだんだんふえて１学科１４名程度、今１６名程度という形で増やしておりますけれども、それに対して平成２４年度からちょっと増えております。２４年度１１９名、推薦志願者ですね。今年は１３４人。推薦基準を少し緩和したということが功を奏していますが、そういうことが現れていると思います。

それから、志願者の確保ということで、私ども女子学生を増やそうという形で今考えている訳ですけれども、女子学生の動向についてもこのような状況で、これは志願者数でございますけれども、今年度９７名ございました、昨年度が８３名なんですが、当然学科によって非常に偏りがございまして、下側の経営情報学科、これが４０名中、約３０名くらいが女の子になります。実際入ってくるは。物質が４０名中２０名くらいでしょうか。それから、制御はちょっと波がありますけれども、５から１０名、それから機械、電気に至っては１人かゼロかというような、そういう状況でございます。

大体、毎年女子学生が５０名くらいで、掛ける５学年の２５０名くらいですかね、１，０００名中、今２５０名くらいの女子学生が在学しておりますけれども、なかなか総枠が厳しい中で志願者を増やすといえば、高専の場合はもう女子学生をターゲットにしたＰＲ活動をする必要があろうかと、このように考えております。

次に、２つ目のサブ目標、「教育課程の編成等」という項目に移らせていただきます。ここでは、２つの項目について報告いたします。

①番、本校５学科のうちの３つの学科、すなわち機械工学科、電気工学科、制御情報工学科、この３学科を１学科としてくくって運営をしていこうということを検討して素案を出したんですけれども、当該学科いずれからも反対という意見が出まして、今、一括りができなければどうするかというと、学科のあり方を含む教育改革、高度化について新たな切り口で議論を進めていく必要が生じております。これが今日の３番目の議題に関連するかもわかりましせんけれども、またお読みいただければと思います。

それから、②番の「モデルコアカリキュラム導入に向けた検討」いうタイトルでございますけれども、下の注にコアカリキュラムということで、ちょっと御説明させていただきます。「高専生が最低限習得すべき学習内容とその水準」を示すものであり、どこの高専生でも同じ水準を保証することが必要という考えのもと、高専共通の到達目標を定めたもの。すなわち「国立高専機構設置の高専として、その卒業生全員のミニマムスタンダードとしての共通に備える能力と資質、つまり高専教育が達成すべき共通の到達目標を明らかにするもの」ということで、これまでばらばらに高専運営していたのが、１６年度に一法人化したということで、一つの基準が示されて、これがコアカリキュラムでございまして、これが平成２３年度に、この試案が報告されました。その試案を受けて、今対応しているんですが、高専機構が定めたこのモデルコアカリキュラムに対する本校各科の対応状況を調査し、未対応箇所の洗い出しを行いましたと。

各科それぞれ問題もあるんですが、例えば自然科学においてはライフサイエンスやアースサイエンスなどの学習内容が不足していることがわかったということで、本校は特に生命科学とか、こういった地球科学とかいった学習内容は全く触れていないのが現状でございまして、これがモデルコアカリキュラムの学習の内容に盛り込まれたことによって、どこかで対応しないといけないと、こういう問題点が明らかになりました。これから対応策を練っていきます。

２ページにいきまして、３つ目のサブ目標、「優れた教員の確保」いうことでございまして、①番、「教員の出入りと採用状況」をご報告させていただきます。今年度４名の退職者、定年退職者と３名の転出者がございました。７名の採用人事を行いました。この７名については来月４月に着任予定でございますが、これまでの経緯からまだ２名が未補充という状況になっております。さらに、公募していく必要がございます。

それから、②番として「女性教員の積極的登用」ということを図っていく必要があろうかと思いまして、上記７名の採用者のうち１名の女性教員が確保できましたが、退職者のうち１名が女性教員であるため、結果的にはプラス・マイナス・ゼロということで、本年度本校約８０名の教員がいますけれども、うち６名が女性教員でございます。来年度も変わらず６名ということで、これも高専機構本部の指針が示されまして、本校の教員に占める女性の割合を１５％以上になるように、今後の教員採用の際に考慮することが了承されています。本校の運営委員会ですね。ということで、こういった数値目標に基づいて、今後採用人事を考えていく必要があろうかと思います。

次、４つ目のサブ目標、「教育の質の向上及び改善のためのシステム」ということで、２点御報告させていただきます。まず①番、「物質工学科の単独ＪＡＢＥＥ受審」。このＪＡＢＥＥという言葉、耳なれない委員の方もいらっしゃると思います。

その中ほどを読みます。「大学等の高等教育機関で実施されている技術者を育成する教育プログラム」。社会の要求水準を満たしているかを国際的な同等性を持つ認定基準に基づいて認定する機関ということで、この機関が１９９９年に発足しまして、最初に認定したのは２００１年だったそうです。

本校は平成１６年に最初にこのＪＡＢＥＥ受審をしたのですけれども、当時は中ほどの絵に示しておりますけれども、現状の教育プログラムと書いておりますが、プログラム名「創造デザイン工学教育プログラム」と言っております。これは、本科の機械、電気、制御情報の各学科とその卒業生の受け入れ先である生産システム工学専攻と、物質工学科とその卒業生を受け入れる物質工学専攻ですね。この２つの専攻が１つの教育プログラムをつくりまして受審していたんですけれども、そのうち物質工学科と物質工学専攻が分離いたしまして、平成２７年度に２つのプログラムに分かれると。１つは、「生産システム教育プログラム」です。名前は変わりますけれども、構成の学科は一緒でございます。機械、電気、制御３学科のプログラム、それと分離した物質工学のプログラムですね。なぜ分離したかというその理由でございますけれども、応用化学分野に特化した専門科目の充実を図るという目的で分離するということになりました。

それと、もう一つが下側の図に「経営情報工学教育プログラム」があります。これは、経営情報学科と専攻科が関与するプログラムでございまして、これは変更なしという形でまいります。

それから、２つ目、「在校生並びに企業、卒業した修了生に対するアンケート調査結果」、これは昨年の８月、９月に実施いたしました。在校生約１，０００名と企業は６６０社程度送って回答２５０社くらい。それから卒業生８００人に対して１６０名回答を得たんですけれども、その調査結果を分析いたしますと、１）企業の本校の卒業生や修了生に対する満足といたしましては、９０％以上の企業で非常に満足あるいはほぼ満足しているという回答が得られたものの、英語能力については半分以上の企業が満足していないと、こういう状況が明らかになりました。

それから、２）番、学生側の卒業生や修了生の本校教育に対する満足度、これも７割程度が満足していると答えているものの、英語教育についてはちょっと満足をしていないということで、英語教育も改善していく必要があるのかという結果が得られております。

また、修了生では一般科目教育と教員の質と指導内容にちょっと不満を示していると。卒業生でも情報処理教育と教員の質・指導に満足度が５０％と低迷しているということで、私ども教員の側の指導方法というものを少し改善していく必要がある。これについては、公開授業とか教員のＦＤとかやっているんですけど、なかなか目に見えた効果が現れていないということでございます。

３ページ目、５つ目のサブ目標、「学生支援、生活支援関係」でございます。２つの項目をいたします。１つ目、「相談窓口の拡充」ということで、今年度より月曜日から金曜日までの午後、４名いるカウンセラーのうちのいずれか１名が来校して、常に学生の相談に対応できる体制を整えたということで、今、平成２０年度からカウンセラーによる相談延べ件数は伸びておりますが、今年度は２５４件ということで非常に増えております。このくらい悩み多き学生がいるのかということでございます。

それから、２つ目の「キャリア教育」。本校キャリア支援室というのを作りましたので、これが主体になりまして本年度企業人による講和を１０回、キャリア導入教育１０回、会社説明会、これは実際に企業の方が来られました。それから進学説明会、これは大学さんのほうから本校に来られて説明された。こういったものを開催しております。

それから、６番目、「教育環境の整備・活用」ということで、①番、「教室へのプロジェクタの設置」ということで、下側に写真Ａとして示しております。天井に固定した液晶プロジェクタ、それからそれを投影するスクリーンですね、天井からぶら下げたスクリーン、こういった状態、パソコンを教室に持っていけば画面のコンセント、コードを持っていけば壁にコンセントがありますので、パソコンを繋げばすぐ液晶プロジェクタに映し出して授業に活用できると、こういうシステムでございますけれども、これを表に示しますように平成２２年度から随時各ホームルームに設置して、本年度、残りの５教室に設置したことによって、全２５クラス設置完了をいたしました。

それから、②番の「教室の机、椅子の更新」ということで、これも昨年度から１学年ずつ更新している。今年は、昨年度は１年生を対象とした５クラス、それから今年は５年生を対象とした５クラス、机と椅子、写真に示しますようなセットで入れかえをしました。これも、年度計画で進めていくということになっております。

以上が、「教育に関する事項」でございました。

次、２番目の「研究に関する事項」といたしまして、共同研究、受託研究、寄附金、科研費の件数を年度ごとに示しております。今年度、ご覧のような件数になっております。これまでは、件数を増やすというようなことを念頭に置きながら活動していったわけですけども、どうも機構本部は件数のみならず金額的なことも増やせよというような指示が来ておりまして、どうなるのかと今ちょっと苦慮しておりますけれども、こういう状況でそんなに飛躍的に増えたとか、減ったとかいう状況ではございません。

それから、４ページ目でございますが、３番、「社会との連携、国際交流」に関しまして、（１）「社会との連携に関する事項」、１つ目として「公開講座」、ご覧の表ａのように今年度が８講座開設させていただきました。対象者、社会人から小中学生、延べ８講座で９０名の受講者がございました。

それから、ｂの「文化サロン」ですか、２５名の参加がございました。

それから、②番の「中小企業技術者の知識・技術のスキルアップ講座」とあります。「クラフトマンシップスタジオ実践講座」、これは平成１８年度でしたか、経産省の補助金を入れてスタートした事業でございますけれども、補助金が切れた後も自立化して現在も続いている講座でございます。それから、「寺子屋づくり講座」です。この２つの講座、企業人対象で、講座を開設しております。

それから、３つ目、③番、「卒業生のＵターン求人・求職対応システム」、「本校卒業生のＵターン希望者と地元企業の求人のマッチングを図るＵターン求人・求職システムを整備し、８月より正式なサービスを開始しました」。これまでに地元企業２７社からシステムへの登録を得ており、試行時からのマッチング実績は１０人弱となっています。これもキャリア支援室が中心になって活動している部分でございます。

それから、（２）「国際交流に関する事項」ということで、①番、「海外学術交流協定締結校を活用した本校学生の海外インターンシップや語学研修」ということで、海外インターンシップについては、今年度中国のハルピン工業大学３名、それから韓国の東儀科学大学８名、この１１名、これはいずれも本校の専攻科生でございます。それから、ｂの「語学研修」ですが、ニューキャッスル大学１７名、それからハルピン２名、東儀が２名、コムソモリスク（ロシア）３名、これが専攻科生と本科生。こういう人数が参加いたしました。

それから、②番、逆に今度は「留学生の受け入れ拡大」ということですけど、まず受け入れ状況でございますが、３年次に留学生が入ってくるんですが、機械、電気、物質、本年３年生が４名、それから４年生が４名、５年生が３名の現在今１１名の留学生が宇部高専に在籍しております。これらの受け入れ留学生というのは、全て国費留学生とマレーシア政府派遣の留学生でございます。さらに、平成２２年度から高専機構としての私費留学生の受け入れ試験制度が始まりまして、２２年、２３年ともに本校への希望留学生はいましたけれども、その試験に不合格で実際には入っておりません。ただ、本年度１名この私費留学生合格が決まりまして、来年度から入ってくる予定にはなっております。

以上、簡単ではございますけれども、本校の本年度の計画の取り組み状況について報告させていただきました。

（議長）

どうもありがとうございました。それでは、御説明につきまして御質疑、御意見等がございましたらよろしくお願いいたします。

（千葉委員）

ちょっと気にかかったのが、２ページのところで、なかなかしっかりした学生を育てておられるというのはわかるんですけれども、この９０％以上の企業で非常に「満

足」、「ほぼ満足」している、これはこれでいいと思うんですけれども、いずれも「英語能力」については半分以上の企業が満足していない、英語教育の意識が非常に低い、これは英語教育のカリキュラムはどういうふうになっているんですか。

それはちゃんとした英語の時間はあるんですね？

(副校長)

それはございます。ただ、文法とか読み書きとか、複数の教員がそのクラスを担当しているんですけれども、なかなか横の連絡がうまいこととれていないというような学生からの指摘はございましたので、これはちょっと改善していかないといけないと思っています。

(千葉委員)

自分の経験でいくと、私が大してできるわけじゃないんだけれども、若い方に言うときはこう言っているわけですよ。私の時代には、英語を書くというのは大体やります。ところがしゃべるとか、そういうところまでなかなかできないんだけど、私たちの時代には英語は英会話とか、そういった英語はあやつれるよと、自由にあやつれるよということは非常に有利な点になりました。だけど、若い方ですね、あなたたちの時代はできないということが欠点になりますよ。だから、逆に言うとできて当たり前の時代がもう迫っているということを、この二、三十年前からやあやあ言っておるんですよ。その点、上がってきたかどうかは別として。

ということは教員の方たちがそう自覚され、子供たちを目覚めさせないかんですね。若いあなたたちはもっとしないと、そこでハンディがついたらもうおかしくなりますよというようなことを、やっぱり教員の先生方みんなが子供たちに熱く話かけていただかないと、単なる授業だけでぱっとやろうとか、そうじゃなくて、本当に必要なんですよと。もう目の前に来ているんですよということを言われるべきだと。言っておられるかもわかりません。よく状況を知らないでしゃべっているんですけど、そんな感じがしました。ちょっと、教育が遅れているのかなとこういう感じを受けました。

(校長)

ありがとうございます。たまたまここ英語って書いているんだけれども、個別にいろんなことを言うときに、英語以外の科目についてもまちまちで、ただ英語というのが数が出たからこうなっているかもしれないんですけれども、私の感じているのは例えば英語についていうと、１年生のときにやるのが中学校の復習のように感じちゃうという。３年生とかになるとＴＯＥＩＣが大事というんで、ＴＯＥＩＣ、ＴＯＥＩＣというふうにいうんで、入ってきたときとそれから３年、４年、５年とか、インターシップにいくだとか、あるいは特研やるとか、あるいは会社訪問やるとかって、そういうふうになってきたときの英語に対する考え方と、それから入ってきたときの情報とが何かえらい落差があるように、学生は感じている。

それは実は先生方が何も言っていないわけじゃなくて、言っているんだけどもそのときに自分のこととして聞いていない。それは英語だけじゃなくてもう全ての科目に通じている。それで、そういう意味で科目ごとにはそれぞれシラバスもあるし、だからそれを見ればわかるだろうということかもしれないんだけど、学生にはなかなかそれが通じない。だから、それを何度も何度も繰り返して言わなきゃいけないということで、それで改めてそういうようなことをちゃんと各科目の先生はその科目についてどういうことに関連するんだとか、そういうことは言ってもらっているんだろうけども、それをやっていると今度は内容的に教える時間が減ってくるというようなことになるから、だからそれこそ勉強の仕方というような手ほどきみたいなことをやる導入教育というのを設けていかないと、各科目に任せたのではもうとても埒があかないという認識を持っています。

(久保田委員)

英語、ドルなんかもそうなんですけど、英語とかドルとかいったものは日本語とか日本円とちょっと違うんですよね。要するに、例えば韓国の会社とタイの会社が取り引きするときに、ドルで決済して英語で契約をつくるわけですよ。いろんな交渉もやるわけですよ。それしか今のところないんですよね。英語が恐らくグローバルランゲージからそうじゃないものになるのには相当時間がかかりますよ。５０年とか１００年とか、１００年後もそうじゃないかもしれない。それくらいもうかなり言語として非常に重要であるということですよね。だから、やっぱり英語圏でやっている人と、ノン英語圏の人はそれだけハンディキャップがあるんですよね。これは今更わあわあ言ってもしようがない。現実の問題としてそうですからね。

それで、この要覧ですね。１６ページを見ると、英文法と英語解釈みたいな感じなわけですよ。やっぱり本当に英語がいるということを大人のほうが子供に教えないとわからないですよね。わかったころにはもう３０か４０になっちゃってて、ちょっと遅いみたいなことになるので、必ずしもだから例えば高専に入って、次にある大学とか大学院を受けるときに、余りエネルギーの割に役に立たないかもしれないけど、でも長い人生考えると実は非常に重要であるということなんですよね。そこのところは、やっぱり大人が教えてあげたり、仕組みとしてこの中に。外国人とコミュニケーションして意図が通じるって結構喜びなんですよね。その辺のところは若い人わかると思うんですよね。だから、若いときに早く外国なんか行って、自分が言ったこと或いは人が話した言葉がわかるって非常にうれしいですからね。その辺のところを、さっきマレーシアとかなんとかいろんな人が来てるみたいだけど、何か仕組みがつくれるといいんじゃないかなという感じはあるんで、恐らく私もそうだったんですけど、最初は理科系なんかに行って、意外に英語って余り得意じゃないケースがありますよね。これは一概に言えないですけど。英語が重要であるということで、だから英語を話し

たり読んだりいろいろすることが結構楽しいんだということを、やっぱり教えてやる仕組みというか、先生とかが重要じゃないかなと思いますけども、感想みたいになってしまって、以上です。

(千葉委員)

もう一つつけ加えますと、結局、英語能力があるから英語がうまいとかいったこととか、そういうことはないわけですね。言葉ですから、ちょっとそちらに関心が向けば僕は行けるんじゃないかと。

それから、私の成功体験からいくと、スペインに宇部から行ってプラントを作ってうまく動かなかった。初めて作ったので。宇部興産の関係会社ですよ。そこで日本人が行って、装置つくったけどうまく動かない、これが半年、8カ月くらい動かなかったですね。何とかしろということで、私が行って話をして改造やるのに、このくらいの人数の会議ですよ。そのときに、ちょっと何かあるとあっちはあっちでスペイン語でちょこちょこと言う、日本人は日本人でごちょごちょと言う、相手が何を言っているかわからん訳ですよ。だからもううまくいかないとかいうよりも、お互いに不信感が出ている、この会議はおかしいということで、僕はもう一切英語しか許さんと、この会議は全部英語でということで、なかなか日本人に黙れとかいうのはなかなか、英語でいうのはなかなかちょっと照れくさいんだけど、そういうやつを全部英語にしたら、まずそういう不信感というのはなくなりました。そうすると、方向を一つにもっていって非常にうまく改造というか、話がうまくいったなというケースはあります。

そのときなんか、家帰って酒飲みながら「黙れ、うるさい黙れ」と言ったことに、女房が英語では何と言っているのっていうから、「I don't think so」やと言ったら女房が笑っておったですけど、そういうのって、それは言い方によって「I don't think so」と言えば、「うるさい黙れ」とこういう話になるわけですね。言葉というのはそんなものだと私は認識しているので、結局、技術者の場合は特にやりやすいのは図面とかいう共通語があるんですね。それを生かしたコミュニケーションが非常にとれるわけですよ。ですから、必ず全部黒板使って、ホワイトボード、あれを使ってちゃんとやると。そういったこともなれて何かやり出すと、久保田さんが言われたコミュニケーションをとるこつというんですかね、そういったものができてくると。そういうプラクティカルな面のところを先生方が話をされる。やっぱりそういうものになっているなということを子供たちに悟らせることが必要じゃないかなというふうに考えます。

(金重委員)

私も、高専の中でうろうろしてたら、ほかの学校と比べてどうかというのはたくさんは知らないんですけど、少し私感じるのは外国人がまず少ないですね。宇部高専、留学生の数もそうなんですけど、余り見えん。それと、外国人教員というのがやっぱ

りかなり最近は増えているんですね。大学もそうですし、日本語をしゃべる外国人って結構いますし、そういう環境がやっぱりこの宇部高専の中に少し少ないんじゃないかなという感じがしますね。やっぱり接するというか、そういういろんな外国人と接する機会が増えないといかん。

それと、先生方が外国に教員として、例えば派遣教員として１年、２年、いや３年とか派遣されるか、あるいは外国人の教員の交換交流をやるとか、そういうやっぱり実践的に自分で肌で感じる機会というか、もう少し、ほかの私が知っている限りではやっぱり宇部高専の中はちょっと少ないような感じがしますね。外国人が余り見当たらないというか、どこに行っても今は多いですね。英語圏だけじゃないですがね。中国人だとかっていうのもありますよね。だけど、中国人も英語をしゃべりますし、韓国人も英語をしゃべりますし、台湾人なんかも英語をしゃべるし、東南アジアはみんな英語をしゃべる。そういう人と接するんなら、さっき言われたように英語圏といったら、英語を母国語としない人たちが英語で話し合うという機会もたくさん出てくると、やっぱコミュニケーションをするのに、英語はやっぱり勉強せないかんという気持ちになるというか、それと学校のカリキュラムもあるかもしれない。

私もある意味、無理やり行かされて、一人で孤軍奮闘というかそういうイングリッシュを覚えたんですけども、そういう環境がやっぱり大事だと思うんですけど。もう少し、外国人がうろうろしてもらえないのかなというそういう感じです。

（校長）

いろいろ御指摘いただくことはごもっともで、ただ留学生なんかもちょうど３年前は３人だったのが今は１１名ということで、留学生がもっと来ればというふうに思ったりもしますけど、そういうふうになってくると今度は留学生に対するケアも、ある科目によっては予備会というか、そういうのをやっているんだけど、もう全く、宇部高専に来たんだから宇部高専の日本人の学生と同じようにという考えもあるんですけど、ちょっとそういう外国人留学生に対するカリキュラムの検討とかそういうふうなこともちょっとやらないといけないところがあるかなと思ったりしますし、それから教員については先生方の研究なんかで、研究交流で見えるような場合はあるんですけど、なかなか外国人の教員を雇うというところまではちょっと、今は人数も教員の数も限られているし、だからそういう教員を入れて雰囲気をつくるのがいいのか、やはり日本語でまだ教育できるというそういう状況なんだから、ちゃんとした日本人の教員でしっかりやるというのがいいのかとか、その辺はなかなか大学のように外国人教員を何名かという余裕は今のところは難しいかと思うんですけれども、できるだけそういう学生、短期間でも先ほどの海外研修のような形で出かけた学生の報告を聞いていると、やはり中国、韓国そういうところに行ったときに、向こうはとにかくアグレッシブルに英語でどんどん話かけてくる、質問をしてくる、英語をちゃんと話せるよ

うにしないといけないと思ったというのが、みんなが同じような感想でいうんですけど、だからそういう形で一度そういう経験をさせて、それがどこまで続くかわからないんだけど、そういう気持ちのところでなんかやっていくというような、いろんな仕組みを考えなきゃいけないかなと思っています。

（千葉委員）

２０年以上前、フィンランド人と一緒に仕事をしたとき、そのときにフィンランドの人間は家族で１８人くらいですかね、子供たちも皆来て、それは国から教科書を皆送ってくる、それは親が教える、ただその地でその学校には入りたい、また日本語はないという格好で、そのとき厚南小学校に中学生１年生も厚南小学校に皆行ってもらったんです。そのとき、県から教育委員会からずっと話して、先生の世界というのは物すごく皆抵抗されるんですね。だから、ノー、ノーという格好で、だからそれをとにかく厚南小学校に無理やりうちの何人かを押し込んで、そしたら１日目にフィンランド人みんな勝手やから、給食を皆配って、何かやったんだろう、自分のやつをすぐ食べ始めたんで女子が笑ったらぽこんと殴ったと。もう家へ帰ってしもうた。そして私のところに女の子が電話してきて、先生が電話してきて通訳の女の子が来たから行きましょうかというから行くなと、もう先生らに任しておけと、日本語と英語でちゃんと話、コミュニケーションがとれるはずだと。だから、そういう格好で今から２０年以上前に厚南小学校の国際化というのは、私が開いたつもりなんですよ。だから、教育委員会のほうも何かそういうふうなことをやっぱり仕掛けをつくるというんですかね、何か、もうそういう時代はきていると。つまらんところでハンディつけたら損するんだよということを、十分に県に伝えたい。

（竹本委員）

ＰＲになりますけど、来年度から山口県のグローバル人材の育成ということを掲げ、英語のいわゆるディベート大会をやっていこうと、全国大会もあるわけですけど、そんな取り組みを来年度から始める。昨年度始めて、２校でやっていたんですけど、もっと大きくやっていこうとそういう企画を立てています。

（議長）

コミュニケーション能力のことだと思うんですね、我々もそうなんですね、大学でも基本的に一緒なんですけど、やっぱり学生がコミュニケーション、日本語でもできないのにという感じのところがあるんですけどね。やっぱり、最終的にはカリキュラムの中にそういったところを入れるのが大学としても重要なんだろうなというふうには思います。

（山田委員）

今御報告いただいたこの資料の２って、このいただいた資料の中期計画と横並びでみると、中期計画の報告に沿って大体書かれているようなことですよね。

要は、我々も２１年から独法になって、今１期目の４年目を走っているんですけども、基本的に考え方としていわゆるＰＤＣＡサイクルをしっかり回すということがあると思うんですね。いわゆるこの中期計画に沿って、今回の資料２がつくられているとしたら、ここに書かれているのはいわゆる多くは結果だけですよね。こうであったということで、要は目標に対して２４年度どうであったのかと、目標どおりいったのかどうか、いかなかったときにはいかなかった要因をどこまで深堀しているのか、その深堀の仕方がよかったのかどうなのかなといったところがやっぱり一つの議論の対象になるのかなと思っていてですね。そういう意味での学校内での一つ一つの項目でしっかり議論されると、改善の方向に私は進むのかなというふうに実は思っています。

また、先ほど言ったように非常に数が少ないということで、そういう意味ではやりやすいところがあるんですけども、そういったとらえ方でこの取り組み状況をもう一度見直されると意味があるのかなということで見させていただきました。以上です。

（副校長）

御指摘ありがとうございました。計画の中に数値目標というものを本来は入れるべきものなのでしょうけれども、これを入れちゃうと非常に重くなるということで、あえて数値を入れない計画というのがございまして、そうすると逆にじゃあ総括でものすごく深刻なという。来年度の計画を立てるときに最終的にいろいろ対応させていただこうと思います。ありがとうございました。

（議長）

それでは、まだ議論もあるかと思いますけど、時間のこともございますので、最後の議題に移りたいと思います。議題３、「宇部高専の教育改革・高度化について」ということで、福政先生よろしくお願いします。

（校長）

それでは、資料３ですけど、座ったままで説明させていただきます。

この議題の１番、２番に絡みますけども、これからの宇部高専ということで、５０年まで、これからも５０年というようなスタンスで見るときに、高専というのはどうなっているかという話と、宇部高専の抱えている問題というようなことで、少しお話させていただきます。

では、１番の「高専の目的と責務」ということで、これは本科、専攻科含めてこういう学校教育法にうたってあるということで、とにかく技術者養成ということを受けて、この高専が設置されたという経緯があるんですけれども、ここに、実はこういう１１５条にこういうことがうたってある。それで、本科だけではなくって専攻科っていうものがさらに加わった形で今動いております。

それで、高専を取り巻く環境の変化、これは高等教育がユニバーサル化してきたということ、大学が非常に大量にできていることの一方で、工業高校卒業生の不足って

いうのはそういうのを受けて、高専っていうのが間隙を縫うような形で社会から「高専はいいんだ」というふうに見られているところもあるんじゃないかいうことがあって、これからの高専のあり方っていうのは非常に難しくなってきているというふうに思います。

まず、人口の減少っていうのがありまして、ちょっと棒グラフで書いてますけど、山口県内の中卒者の推移ということで、平成２５年でいうと大体１万三千数百というような形です。

それで、山口県は、宇部高専、徳山高専、それから大島商船とありますけど、大島商船は瀬戸内３商船というところで入試とかを共通でやったり、それから全国区で集めたりして、何か志願者の半数以上が山口県外で、山口県外のほうが多いというようなことを言ってましたから、宇部高専と徳山というんでは、東と西にわけると６千人ぐらいの母集団のところで宇部高専はこれからやっていくのかなというような感じを持っております。

倍率とかは、先ほど資料にもあったと思いますのでちょっと見ていただいて、そこに小中学生の理科離れだとかあるいはグローバル化というようなことで産業構造が変化してきている、高専というものに対するイメージが、高専を経験した人にはもう非常にいい所だということでリピーターになるんですけど、なかなか横への広がりというのが難しい。さらに、今のように産業が成熟化してきたりしてくると、ここを出ればどういうふうになるっていうのが非常にわかりづらくなっている。

それから、また更に中卒の段階で宇部高専は経営情報という学科もありますけども、理工系に自分の将来を向けるっていうような決断をするっていうのが難しくなってくるような、そういう状況だとかいろんなことがあって今の状況になっていると思いますけれど、それで３番の「今後の高専の在り方」とあるんですが、中教審なんかの委員会でいろいろ議論されるときに、高等専門学校卒業生に期待する役割っていうことで、括弧でちょっとくくってますけれども、「産業が高度化する中で、ものづくりにおいては、企画、研究開発、設計、生産、品質管理、顧客対応というサイクルの各段階において多用な技術者が必要となっており」云々と、こう書いてあります。それで、「実践的課題設定」、それから「解決能力を鍛えられた高等専門学校卒業生の活躍の場が広がっている」と、うたっているんですけども、ものづくりのところでいろんな分野があるということで、それをただどっかの機械なら機械、電気なら電気というようなことだけをやるっていうことじゃなくて、こういう流れがあるということを知らしめなきゃいけないというようなことで、エンジニアリング・デザインというようなそういう感覚を身につけなければいけないっていうようなことが後のほうへ出てまいりますが、こういうことがあります。

そして、「高等専門学校教育により養成する人材像」というので、こういうことも

いろいろ言われております。本科、専攻科に対してこういうような中教審での高専に対する期待というか評価について非常にいいものがいろいろ上げてあるんですけども、３ページの「その他の指摘事項」ということでこういうことを今後やっていかなければいけない。こういう「高等専門学校教育の充実について」というところで指摘されているものを上げております。

こういう要求を受けて、高等専門学校におけるキャリア教育・職業教育の充実ということで、これまでもいろいろやっているんですけど、さらに入ってくる学生の意識が非常に多様化してきているので、高専と言えどもこういうキャリア教育・職業教育の充実ということを図らなければいけない。

それから、先ほどからいろいろ出てきておりましたけども、「学生自身の抱える課題」ということで「コミュニケーション能力」、それから「職業人としての基本的な能力の低下」、それから「職業意識・職業観の未熟さ」、「精神的・社会的自立が遅れる傾向」にある、あるいは「進路意識や目的意識が希薄なまま進学する者の増加」、こういうのは宇部高専の学生を見ていてもこういう傾向を持つ学生が増えてきているような印象を持っております。

それで、大半はこういう学校をいろいろ選んで来るわけなんで、将来はそういう技術者だとかの分野でやっていく意識で入ってきているんでしょうけど、それをもう一度宇部高専で確認させる、あるいは納得してやる気を起こさせるというようなそういうようなことをやっていかないといけないというふうに思っております。

次、４ページに移りまして、「キャリア教育／職業教育定義」ということも、これも中教審で、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」というところでまとめられた、キャリア教育、職業教育、こういうのが入っております。

それから、「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な能力」というものがうたわれてるわけで、これはやはりカリキュラムを通して、あるいは実験、実習、そういうものを通して植えつけていくように考えていかなきゃいけないと。

創設当初は、本当に優秀な学生さんが入学してくるわけで、学生本人の切磋琢磨っていうのが非常にうまくいっている、それで、基礎教育から、共通教育から専門科目へのくさび型教育っていうのが非常に考えどおりうまくこなされていってたのが、最近は本当にそういうところをうまく教員側が手当するような形でやっていかないといけなくなっているんだろうというふうに感じております。

更に、４ページの最後の括弧でくくっているところですけども、「高等教育機関および高等専門学校におけるキャリア教育・職業教育の充実方策」ということで、こういうようなことをいろいろ提言されております。

それで、宇部高専で３―３ですけど、「宇部高専の教育に対する社会からの要請」

ということで、先ほど杉本年生のほうから報告した今年度の実績、そこでも触れているんですけど、こういうアンケートで宇部高専の教育目標以外に必要と考えられる項目というのでこういうことが上がってて、ここで英語とか実践的な実技とかキャリア教育、こんなことが上がってたということで、それは十分意識して考えていきたい。それからエンジニアリング・デザイン教育の必要性という、これもかなり大きなパーセンテージで必要だというふうな意見が寄せられている。

それで、実は宇部高専の目指す方向性といったものですけど、５０周年を迎えるに当たって学校の基本理念として学生たちにも本当に口ずさめるようなということで、「挑戦し　探求し　高く羽ばたく　宇部高専」こういうような基本理念のものとにやっていきたいと。

それで、宇部高専の在り方として、現在の社会状況をちゃんと意識してのことでございますけども、高専創設の原点に戻って「想像力と実践力を持つ人間性豊かな中核的技術者の育成」、これに徹すると。

それと、もう一つ大きな狙い目として、やはり地域に役立つ宇部高専、大学とはまた異なる高等教育機関としての役割を果たせるような「地域に役立つ宇部高専」、こういうことを２つの指針としてこれからやっていかなければいけないだろうと、こういうふうに思っております。

４－１で「要請すべき人材像」、これはこれまでも掲げてたものですけども、これはもうそのまま今後ともちゃんとこういう形でやっていかないといけないだろうと。

「山口県の産業構造を踏まえた専門学科の在り方」ですけど、これは今の宇部高専の５学科というのが、特にこの学科が需要が少ないとかいうようなそういうようなことは考えておりませんので、今カバーしている分野っていうのは、非常にそれで県内のニーズをちゃんと受けた形の学科構成になっているんであろうと、そういうふうに考えております。

しかし、その中で、機械、電気、制御と、物質、経営情報というのとちょっと違ってて、やはり機械、電気、制御というのは高専の中で大体どこの学校でも結構あって、高専の中でみたときにもやはり競争相手たくさんいるわけで、実際に進学、就職っていうようなことになってくると、このあたり競争相手が多いだろうと。就職で県外も行くんだけど、挑戦するけど落ちてくるんで、だから県内っていうそういうようなことであれば、ちょっと本来の趣旨に反するのでちゃんとした学生教育をしないといけない。それから、物質とか経営情報は女子学生もかなり多いというようなこともあったり、それからやはり高専の中での学科の比率がそう高くないですから、これは非常に希少価値あるし、それから県内の企業との関係も深いという、そういう認識を今持っております。

４－３で、「マトリックス型基盤教育プログラム」とこう言ってますけど、実は

３年前から始めた導入教育の一つで、宇部高専５学科に入ってくる学生に共通にやる気を起こす、あるいは自分が選んだ学科でいいんだというようなことも、学生を納得させるような今後の「ものづくり」というのは今日本はどういう状況にあって、エネルギー問題どうだとか、それから環境問題どういうふうにものづくりと絡んでくるかというような、そういう全体の専門学科の科目に入っていく導入のようなところをやるというような意図で進めたプログラムで、マトリックス型と言ってるのは、学科の専門科目の教育を縦軸と考えて、それに対して学科横断的に考えるという意味で、それをマトリックス型という言い方をしましたけども、そういう導入教育の一種という考えで始めたもので、これは今後、先ほどから言われているようないろんな学生へのキャリアの位置づけとか、それぞれの科目がどういうふうに必要になってくるかというようなことも含めたリファインをして導入教育という形でもっていきたいと思っております。

次の４－４で、「地域貢献・社会連携」とうたってますけど、先ほどこういう分野で今年度の実施結果報告がございましたが、こういうことをいろいろ地域との連携を取りながらやってるので、それを受ける形で宇部高専の今後の構成というのを検討したい。

５ですけども、「教育内容・方法の高度化」っていうところ。これは教育などの質の保証っていうことに絡む話で、モデルコアカリキュラム、それを今の宇部高専の各学科の科目の中にどういうふうに取り込んでいくのか、それからエンジニアリング・デザイン教育、それをどういうふうに取り込んでいくのかっていうのをこれ考えていかなければいけないと思っております。

それから、「学科等の教育組織の再編」ということですけども、これは今年度の結果のところで、ＪＡＢＥＥプログラムで一部修正していくみたいなことがありましたけども、学生というか志願者に向けて宇部高専はこういうことをやっていくんだっていうメッセージをどういうふうに出していくか、それから３学科大括りっていうやり方、仕切り直しというふうにしましたけど、本科と専攻科の連続性っていうか連携を強化するときにどういうふうに考えていったらいいかっていうことを含めながら、学科の在り方、それから専攻科の位置づけ、こういうことを今後議論していきたいと。

それから、「グローバル化への対応」というのは、これは先ほども留学生の問題とかそれから海外研修の問題とかいろいろございましたけど、国際交流室を中心に議論したい。

それから、（４）の「地域・産業界への貢献」ですけど、これは地域産業界との連携ということで、これは教育絡みのことでもあるし、それから研究技術相談そういうことでもありますし、それから地域への貢献ということで、宇部高専の施設、人間を活用した地域貢献という、「地域に役立つ宇部高専」というようなことを考えていく

ときの内容で、地域共同テクノセンターを窓口にしてどういうふうにやっていくのか、地域活性化に宇部高専がどう寄与できるのか、そういうようなことを考えながらこれから宇部高専の教育、それから人材養成、そういうようなことを考えていきたいと思っております。

非常に雑駁な説明になりましたけど、宇部高専を取り巻く環境と、それから宇部高専においての教育内容を考えていく上での情報提供と、それから何を目指すかっていうようなことについて御意見をいただければと思います。

以上です。

(議長)

どうもありがとうございました。

それでは、ただいまの御説明に対しまして、御意見等よろしくお願いします。

(千葉委員)

今説明されたその対象は５年間の一貫教育、そこでの人材育成ということが大切です。それから先を目指している人と、そこから社会に出る人とのレベルっていうのはどういうふうに考えておられますか。その先に行く人も包括した５年間の教育だと、こういうことですか。

(校長)

そうです。今宇部高専で大体４割が、この３月でいいますと、卒業生の６割５分が就職という形で社会へ、それから３割５分が進学、これは宇部高専の専攻科へ進学、それから大学３年次編入という形での進学、そういう進学組は大体専攻科へ行くのと、大学へっていうのとか大体同じ、半々ぐらいな割合で巣立っていきます。ですから、進学という形の比率が全国の高専の平均的な値ですけど、３割５分から年によっては４割、学科によっては本当に５割近く進学っていうような学科も年によってはありますので、だからそういう意味で、本科を卒業する学生に対して、そういう進学をする学生も含めて考えていかなきゃいけないと思っております。

(千葉委員)

結局は社会に出て送り込むということだけじゃなくて、要はどの世界に行ってもこの５年間の一環教育はこういう形での前座は座ってますよ、そういう訂正したというんじゃないですかね。

(校長)

それで、今の文科省なんかは、高専もですけども、堀先生がおられるので堀先生のほうが詳しいですけど、大学に対する人材養成についての実施プランだとかいろんなこと言われてて、そういうのが一段落すれば次は高専になるんだろうと思うんですけども、特に高学年の形でいうとインターンシップ制度とかそれから実践だとかあるいはキャリア教育だとか、いろんなことを大学のほうがいろいろ行ってきたときに、じ

やあ高専の独自性、どういうふうに持たせるかっていう、そういうことも含めて今までの５年一貫というところで実験・実習を中心にしながら、それから理論的な裏づけもという、そこのところをどういう形で、入ってくる学生が多様化する中でどういうふうにするか、専攻科生の卒業についての質保証っていうのは一応ＪＡＢＥＥ認定されてるようなそういう教育プログラムで動かしていってるっていう、一応システム的にはそなってるって話で、今度その本科生の質保証をどうするかっていうところでコア・カリキュラムで、「ミニマム・スタンダード」このようなことはちゃんと教えてるんだってようなことで質保証を考えるみたいな高専のスタンスだと思いますし、宇部高専としても先生方非常に苦労してるんですけども、いかにうまく学生に火をつけるかということで、内容的には今やっていることをやればいいんだというんだけど、それをちゃんと学生にしみ込んでいくようにするにどうすればいいかということも含めて、これからの高専教育のあり方で、こうすればいいというのがなかなか一本筋じゃない、いろいろコメントいただければと思います。

（千葉委員）

質問なんですけど、お酒を飲むのは何年生ぐらい。４年生、５年生飲むんですか。

（校長）

専攻科生はいいんですけども、学内では御法度です。ですから、いろんな研究会やって、そういう打ち上げといいますか、交流会というのは隣の工学部の施設を借りてやるっていうような。

（千葉委員）

中学校卒業して高等学校の初めから社会、要するに大学に似たある開放感もありますね。社会に出たなっていうような。その高学年の２年の方が高等学校に入った１年生から見ればまぶしい存在のはずなんですね。ですから、ここの一貫教育っていうのは、ここをうまく生かして早く目覚めさせる。高等学校のときに社会とかそういったものを目覚めさせるようなことを何か取り込むってことに縦の交流とかそういったものは何かあるのかなというのが。学園祭のとき来たときに皆さんやっておられるのは知っているでしょう。ただ、あれは各学年が何かそういうことは何かあるのかなと。それに関してそれを生かしておられるのかどうか。

（校長）

私ばっかりしゃべったらいけないんですけど、スポーツに限りませんけどもクラスマッチというようなイベント、前期、後期やってます。これは１年から５年までが各クラスごとに代表出してやるというものです。今言われた学年でも入学のときの合宿研修というのがあるんですけど、それ以外になると学年でも全体揃って何かやるっていうようなことはちょっと、それは高専祭だとかそういう学校の行事ではありますけど、意識的にはやってなくて、そういう上級生とミックスしてっていうのは今はなく

て、そういうようなことも何かしないといけないかなと。

(議長)

その他ありませんでしょうか。

今、工学部もそうなんですけど、結局、製造業が今どんどん外に出て行って、国内で活躍できる場所がどんどん少なくなっているというふうな認識が我々にはございまして、そういう意味で、高専の授業内容、恐らくもう５０年前から変わってないとは決して申しませんけども、そういった対応、そういうふうな形のものに当然なっているかと思いますけども、そのあたり何か説明していただければと思うんですけどね。

今、山口大学工学部で一番の問題であって、やっぱり学生を外に、外っていうのが外国ですけども行って、とにかく下手な英語でもコミュニケーションとってこいと、今そういう補助とかやっているんですけど、もちろん専門的な知識というのは当然必要だとは思うんですけども、それ以上に、高専の場合も中小企業含めて今海外に行ってますんで、ますます卒業生も、今はいいかもしれません、将来的に卒業生が本当に就職できる場所が保証できるかっていうことですね。そのあたり、我々工学部では危惧を持っておりまして、そういうことは高専は何かお考えでしょうか。

(校長)

高専にずっといる先生方から誰でも意見もらえればいいんですけど、私が来てからの感じでも、まず学生が何やりたいっていうのがなかなか定まらないというのがいるっていうんで、こちらがキャリア教育だとか卒業研究だとか専攻科特別研究、そういったことをやっている指導教員の先生方はいろいろ話して何か出ていくんだろうと思うんですけども、そういう意識をはっきり持たせるようにするっていうそういう内輪の話と、それから「就職率１００％」というふうに言っているんだけど、それは必ずしも自分が行きたいと思っているようなところに行けてる学生の比率がだんだん減少する傾向にある。学生の実力をちゃんとつけるということになっていこうかと思います。

だから、そういう意味で、変わらない部分と変わる部分というようなことをカリキュラムを入れるときに、例えばモデルコアカリキュラムっていうようなものを打ち出されているので、そういうものに対して宇部高専はどういうふうに各学科が考えていくのかということをやっていくのと、それから意識的にエンジニア・デザインという言い方をしましたけど、いろんな学生でコミュニケーション取れるような体験させる、そういうカリキュラム入れていくとか、そういうようなことは一部実施するし、今後もそれを入れていくようなことを検討しているところですね。

(議長)

先ほど、山田さんが言われたように、やはりそれＰＤＣＡ回すっていうのが一番重要なことでで、そのあたりが、何かちょっと見えなかったと思うんですね。先ほどと

同じ発言になってしまうんですけど。

（山田委員）

実は、うちも中身がちょっと違うところがあるんですけど、共通のこんな内容だといいうようなのがあるんです。来年度からいわゆる「ものづくりチーム」というのをつくって、今７つのグループで動かしているんですけども、その中で３つか、今全部７つで１つにならないですが、横断的なチーム、ものづくりチームとしてつくって、要するに学生さんも恐らくそれに１つかなという、まさに達成感といいますか、１つのことをやり上げると、やり遂げようとしているということが大切なような気がして、それができるような仕組みをつくっている。そう意味では、３学科から１つになるっていうのは、そういう意味ではそういったことに繋がるのかなと思って聞かせて頂いたけどうまくいかなかったということですから、何か特出しみたいな感じで、先生おっしゃられたドカンと入れて、試験的にやって、まずはそのためにもまだまだ学生さんそういう意識がそこまで至らないと思いますから、先生方がそういった方向でそういうチームをつくられて、そして先生方の下に学生さんを入れてやられてみるというのも一つの方向なのかなというふうに聞かせていただきました。

（金重委員）

私も高専にいろいろ携わって５年目になるんですけど、非常に感じるのは、高専の１年生、２年生、３年生っていうのは高校生みたいな感じで、そして４年生、５年生っていうのはちょっと違う。先ほどお酒の話がありましたが、専攻科の人っていうのはすごい大人の感じがするんですよね。５年生と専攻科の人って全然違うっていうか、何かなって思って、よく考えてみたらすごい専攻科の人っていうのは自主性があるような感じがするんですけど、いろいろ自分でやっていかないといかんと。そうすると、５年生まではエスカレーター方式に上がっていって、専攻科の人ってすごい自由度があるっていうようなことで、その２年間の影響っていうのがすごいレベルの高い勉強っていう、自分自身が自主的に、それも５年生までは非常に受け身的と、２０歳だということのせいもあるんかもしれないですけど、すごいそういう感じがするんですよ。そうすると、逆に、専攻科の学生をうまく利用する、あるいは専攻科が２年で卒業する必要ない。例えば１年間海外に行くとか、もっとフレキシブルに専攻科の学生を活用する、これが先輩なんだよと見本を見せて、上から順番に「ああいう先輩目指したいな」とか、「こんなことを先輩やってるな」、「すごいな」とか、そういう尊敬される先輩をつくっていくといいんじゃないかなと、そういうふうに専攻科の学生に接して、すごい大人で広く勉強してるし、何をやろうとしているかとかすごい積極的なんです。そんな感じがしましたけどね。

大学でいうと、４年生と大学院とやっぱりその差があって、大人と子供みたいなそんな感じがするんですけど、年齢的に言えば、専攻科の人っていうのは大学院のよう

な感じがする。ただ、年齢が２１歳って言うのは、例えば大学の４年生と高専の専攻科の２年生っていったら同じ年なのに、高専の専攻科の２年生の方がすごい大人びて、もういろんな事にチャレンジして、そんな感じして、就職率もいいんじゃないかなと思うんです。だからそこをもう少し専攻科っていうのはやっぱり独立行政法人になれば、学内でいろいろチャレンジできるんじゃないかなと。それを５年生までの学生は先輩から学んで、また新たな積極的人間をつくるっていうふうなのがいいんじゃないかなと、個人的には最近そう感じています。

（専攻科長）

私、専攻科長から１つ言わしていただきます。先ほどからいろいろ国際化の話も含めて御指摘がありました。うちのほうも国際交流ということで学術交流協定を結んでいるところで、海外インターンシップをやってます。毎年毎年中身も見直し、特に去年ぐらいからインターンシップという名に恥じないようにというか、従来はどっちかっていうと向こうの学生と語学研修での交流っていうのが主な位置づけだったんですけども、どうしてもそれだと垣根を越えられないということで、去年から向こうの学生と本校の学生が同じ授業の中で、実習の中である課題を取り組んでいくっていうようなものをちょっと取り込みまして、そうすると、やっぱりどうしても話さないと課題がうまくクリアできないということで、それでちょっとやってみたんですけどもすごく効果があって、従来に比べるとかなり学生交流できたというふうに思っています。

帰ってきた学生に聞くと、何人かの学生は、自分は将来日本国内の企業に就職するかもしれないけど、その企業で海外勤務をしてみたいと、そういったことを言い始める学生も出てきました。そういったことをやっぱりうまく利用して、今御指摘があったように、本科生の見本にするっていうのも一つ考えていまして、専攻科生にとってはインターンシップという位置づけで学術交流やってるんですけども、それに本科生も希望者がいれば一緒に行かせて、専攻科生のその姿を見て、その姿を見れば本科生はじゃあ自分は専攻科に進学してああいった経験をしてみたいとかそういった流れにしていければと、そういったことも少し考えておりまして、少しずつですけども「国際交流」というのを変えていっています。

私のほうから、以上です。

（議長）

今言ったように、うちも大学院生と学生の関係に似たところがありますね。大学院生の動き見て学生が頑張ろうというのがありますので、非常にいい御提案かと思います。もうちょっと時間があるんですけども、何か具体的に。

（竹本委員）

これはお願いを含めてなんですが、きょう初めてこういった会議に参加させていただきました。私、かねがね思っていることがあるんですが、高等学校教育に関わって

いるんですが、きょうこの資料見させていただいて、高専から随分大学、または専攻科へ編入、進学しておられます。高等学校から大学へということが今問題になっています、中教審でも「高大接続部会」というのがありまして、ここ数年来どういうふうにしたらいいのかといったことで相当議論をされています。高専から、５年生から今のお話がありました専攻科の学生さんたちすごく意識が高いということなんですが、その高専からいわゆる専攻科とか大学進学する人のルートと、高校から大学にいくルート、このあたりの高大、特に高の方ですね。その部分が少し高等専門学校さんのほうで明らかにしていただければ、また国の動きが、特に今、科学・技術系の人材の育成ということがすごく叫ばれていますので、そういったところが明らかになってくれば高等学校教育も随分変わってくるんじゃないかとかそういうことちょっと考えておるわけすが、そういった意味でぜひ取り組みをまた校長さん追求していただいて少しだけ話していただけると私たちの刺激になると、教育委員会としてはそのように思ってますけど、どうぞよろしくお願いいたします。

（議長）

それでは、予定の時間もまいりましたので、以上をもちまして終了させていただきたいと思います。どうも御協力ありがとうございました。

（７）校長謝辞

本日はまことにありがとうございました。

非常に耳の痛い御指摘、とくにＰＤＣＡ回っているのかと言われまして、非常に心の痛い限りです。

それから、新しくということで、各学科の在り方だとか進路とか、要は入学してくる学生さんが宇部高専に来てよかったというふうに思ってもらわないといけないので、こういう改革が学生さんの不利にならないような形でやっていきたいと思います。今日いろいろいただいた御意見参考に、２期目の最後の年になります２５年度に向けても実施し、それから次の３期目の宇部高専の計画策定、そういうところにも参考にさせていただいて、その状況をまた御報告できるようにしたいと思います。

どうもありがとうございました。

（８）閉会

総務課長の進行により、運営諮問会議が終了した。